

## 学芸員になるために：使うことができる「資格」を目指して

菅原 真弓

私は現在、博物館学芸員課程を担当している。自分自身、学部の卒業と同時に学芸員資格を取得しており、またこの資格を生かして美術館の現場で学芸員として6年間勤務をした経験があるとは言え、では現在求められる学芸員とは、というテーマは大きな課題であり、前任校である京都造形芸術大学を含めれば10年間、博物館学芸員課程の教育に携わってきた今日においても、考え続け、模索し続けている問題だ。

課程の教育にあたっては、現場勤務の経験に照らし合わせ、どのような職能や資質が学芸員として必要なかを考え、日々工夫を重ねているが、それが果たして最善の方法なのかどうかは、有資格者である卒業生を送り出し、彼らが実際の現場に立った時、初めて結果が返ってくる事である。幸い、前任校において担当した博物館学芸員課程の卒業生（あるいは修了生<sup>1)</sup>のうち30名近くが現在、博物館の現場で学芸職に就いており、方向性が間違っていなかったことを教えてくれる。

◆56

博物館学芸員の資格取得にあたっては、2012年4月に博物館法施行規則が改正され、大幅な改変が行われた。博物館の現場で有用な、実践的能力を身につけさせることに主眼が置かれている。そしてこの改変は、私自身がそれまでに行ってきた学芸員課程教育の方向性が間違っていなかったことを証明してくれたことになる。つまり私が10年間学生に語り続け、かつその目的に沿ったカリキュラムを実施してきたところの「明日、現場に立てる学芸員を育成する」ことだ。前任校で初めて実施した、学生の手によって実際の展覧会を作るという授業（「博物館実習」）は極めて実践的な、かつ全国の大学でも珍しい事例であった<sup>2)</sup>。一般的に、大学内の「博物館実習」（学内実習）授業で行っているのは、模擬展示である<sup>3)</sup>。何らかの資料を系統的に展示してみるというものだ。しかし私が構築した授業では、展覧会企画の大枠だけを決定し、その他をすべて学生に担当してもらい、かつこれを博物館実習の成果展示としてではなく、通常の展覧会として開催するというものであった。

しかしこれを芸術大学でなく一般的な大学で実施することは、意外に難しい。学生の資質も違い、能力が違うからである。そこでまず、初年度であった2014年度は展示する資料を限定することにした。本学紀州経済史文化史研究所が所蔵する絵葉書とし、そのうち和歌山市などを写したハガキ類などに限定をした。そしてそれら資料の展覧会のまずは企画と展覧会の章立てをグループに分かれて行

わせ、企画内容のプレゼンを行って企画の方向性を決定した。単独での展覧会企画は難しくとも、何人かの知恵を寄せ合えばプランは導き出せるものである。

次に今度は「広報」「デザイン」「編集」「展示」など、展覧会実務ごとに分かれたグループとして再編成し、展覧会チラシやポスター制作、展示プランの策定、関連事業の考案や広報資料送付実務、配布パンフレットの作成などを分担してもらった。さらに個人としては、担当する絵葉書を決めて写された場所やその歴史などに関する調査を行わせ、これらを作品解説パネルとして完成させた。

展覧会タイトルは「Letters from WAKAYAMA ～和歌山からのたより～」とし、和歌山城、和歌浦、そして白浜という名所を取り上げてそれぞれの歴史をたどる展示となった（図1、2）。学生にとっては初めての経験であり、戸惑うことも多くあったかと思われるが、何とかこなしてくれたように思われる。展覧会実務はそれぞれに彼らにとって難しいことであっただろうが、その時々において学芸員の先達として助言を与え、かつ彼ら自身に学芸員として考えてもらうように意見を述べて見守るスタンスとした。なお彼らの記念となるよう、私がデザインソフトを用いて展覧会カタログを作製した（図3）。

さて今年度も既に「博物館実習」の授業が始まっている。今年は経済学部所蔵の油彩画を調査し、修復の必要なども念頭に置きつつ調書を取り、その上で展覧会を作ってもらうこととしている。これらの作品の多くは旧師範学校生徒の筆になるものだ。展覧会がどうなることか予想もつかないが、先輩への敬慕の念を展覧会企画に込めてもらいたいものだと思っている。

#### 注

<sup>1</sup> 京都造形芸術大学では学部および通信教育部にそれぞれ博物館学芸員課程を設置しており、私はそれらすべての主務者であり責任者であった。また通信教育部には、二つの学芸員課程があり、その一つは1年間の学習によって資格取得を目指すインターネットを用いた通信教育課程であった。この課程の学生は、科目等履修生として単位を履修し、そのすべての単位を修得して修了すると、博物館学芸員資格が与えられる。

この課程は、京都造形芸術大学勤務時代に私自身が構築したものである。なおこの課程については、拙稿「Webを用いた双方向型通信教育システムによる博物館学芸員課程の構築と実践」(『全博協研究紀要』11号、2008年)で既に報告している。

<sup>2</sup> 「めばえ—学科優秀作品選抜展」(2009～2012年)。それぞれに進級した春、新4回生による選抜作品展を実施し、この展覧会のキュレーションをすべて、学生が行うもの。本展覧会に関しては、拙稿「大学における博物館教育—資格の有用性を目指して—」(『豊饒の日本美術～小林忠先生古希記念論文集～』2011年3月、藝華書院)において報告を行っている。

<sup>3</sup> 和歌山大学でそれまでに行われていたものも模擬展示であった。紀州経済史文化史研究所所蔵資料の中から、学生に1点ずつ選ばせて解説を書かせ、かつ展示をするという内容であった。



(図1)



(図2)

Letters from Wakayama ~和歌山からのたより~  
2014年2月23日発行

編集・発行：和歌山大学 和歌山大学 紀伊文化センター  
和歌山大学 紀伊文化センター 紀伊文化センター  
編集：和歌山大学 チーム「博物館資料展示A.2014」

編集委員： 木村 浩一  
編集委員： 佐藤 孝  
編集委員： 山本 浩一  
編集委員： 山本 浩一  
編集委員： 山本 浩一  
編集委員： 山本 浩一  
編集委員： 山本 浩一  
編集委員： 山本 浩一  
編集委員： 山本 浩一  
編集委員： 山本 浩一  
編集委員： 山本 浩一

和歌山大学 チーム「博物館資料展示A.2014」  
和歌山大学紀伊経済文化史研究所

(図3)